

保育者の主体的な保育実践研究を推進する 園文化創造アドバイザーに関する考察

横松 友義

本研究では、保育者の主体的な保育実践研究を推進する園文化創造アドバイザーの視点と役割を、理論的及び歴史的考察と関連事例の検討と筆者の現場での体験・考察を通して提示している。園文化創造アドバイザーは、園の職員集団が次のことを行うことを支援する。園文化全体の概要を顕在化させて、園の当面の課題について納得すると共に、主体的努力の継続こそが大切であると共通理解し、自分たちの主体性を強化する。そうして生まれる保育者の主体的な保育実践の中から実践研究を育てていく。生まれる保育実践について、より事実に基づき考察し、より論理的に論じて発展させる。さらに、実践研究の質的向上を求める場合、自分たちのニーズに応じることのできる研究者との協働を実現する。

Keywords : 園文化創造アドバイザー、園の当面の課題、保育者の主体的な保育実践研究、協働

保育の質的向上を目指す保育実践研究の重要性が叫ばれて久しいが、この種の研究は、現在も十分に なされていないと認識されている。例えば、日本における保育関係最大規模の学会である日本保育学会では、『保育学研究』に保育実践をテーマにした論文が少ない状況を改善するために、第47巻の特集論文テーマ「(保育者あるいは保育者中心に…筆者注) 保育実践を振り返る」が設定されている。保育者自身が保育の質的向上を目指す実践研究は、今まさに求められている。

この保育者自身が保育の質的向上を目指す実践研究は、保育そのものに直結していくので、とりわけ重要な保育学研究の一つであると考えられる。そこで、本研究では、保育者自身、あるいは、それに大学等研究者が加わって、より良い保育実践を創造しようとする研究に範囲を限定し、その研究を推進するための新たな視点と役割を、理論的及び歴史的考察と関連事例の検討と筆者の現場での体験・考察を通して提示する。

1. 保育者の主体的な保育実践研究を推進するた

めの新たな視点と役割の提案

1) 最初に園文化全体の概要を顕在化させて園の当面の課題を明らかにしていく

保育実践研究では、一般的に、最初から保育実践そのものを研究対象とする。しかし、保育者の主体的な保育実践研究を従来以上に強力に推進するためには、保育実践研究を始める前に、園文化全体の概要を顕在化させ、園の当面の課題を明らかにしていく視点を持つことを提案したい。なお、ここで言う園文化全体とは、一定の歴史的背景の下でその園が生み出しているすべての物事を指し、保育及び子育て支援そのものや職員体制や研修体制等を含んでいる。例えば、保育園¹⁾の保育計画や幼稚園のカリキュラムは、あくまで園全体で統一性のある形で作成され、保育実践はその全体の中で関連づけながらとらえられるべきものである。また、保育実践は、それぞれの職員の特性や能力によって左右されるし、その能力も、その園の研修体制によって変わってくる。さらに、保護者との連携や保護者の子育てそのものの支援は、当然保育に影響を与える。したがって、園の職員集団が、最初に、園文化全体の概要を

顕在化させ、自分たちの現況をかなり正確に把握し、その園の当面の課題を見いだしていけば、保育実践研究においても、主体性を維持しやすくなると考えられるのである。

このことに関連することとして、筆者は、2008年3月に、佐藤博志より、岡山大学大学院の現職教員対象のスクールリーダー教育において、受講生自身が学校の現状把握と課題設定を行う授業を展開しており、その授業の評判がよいと聞いた。教育組織の現状把握と課題設定ができていることは、より良い現場創造を推進していく上で、十分意義があることがうかがえる。この推進力は、主体的な実践研究の源になると考えられる。

2) 職員が主体的努力を継続しようとすることを第1に重視する

続いて、保育者の主体的な保育実践研究を推進する上で、次の視点が必要であると考えられる。園の保育実践全体は職員が替われば変わる。例えば、優秀なベテラン保育者が退職し、若い新人保育者が加わる場合、一般に、保育の質が低下することが予想される。仮に低下したとしても、そのことを問題視しても建設的ではない。それよりも、その若い新人保育者が保育の質を向上させようと努力することと、その努力を継続することとを重視する必要がある。つまり、職員が替わっていく現実を前提にした場合、優れた保育実践を求めることは当然であるが、第1に重視すべきことは、職員が主体的に努力し、しかも、その努力を継続することであると考えられる。そして、この職員が主体的な努力を継続していく延長線上に、保育者の主体的な保育実践研究の推進が実現していくと考える。

3) 保育者の主体的努力から生じた保育実践の中から実践研究を育てていく

保育者の目的意識は、実践すること、それもより良い実践を生み出すことであり、研究すること自体、研究の質を上げること自体にはない。保育者による実践研究が求められなければならない現況から考えても、一般的に研究が第1に重視されているわけではないことは明らかであろう。そこで、筆者は、1) や2) を通して保育者の主体的努力の継続を実現し、その努力の延長線上に、実践研究が生まれることを基本的考え方とすることを提案したい。筆者の立場では、それぞれの現場から生まれたテーマに基づき、より事実に基づいて考察し、より論理的に論じて、実践をより発展させるように目指すことで、保育実践研究が育っていくことが重要であると考えられる。

その延長線上で、さらに実践研究の質を上げることを目指す場合、その保育現場のニーズに応じるこ

とのできる大学等研究者との協働を実現する必要がある。このことによって、大学等の研究成果が、保育者の主体的な保育実践研究により活かされることにもなる。

4) 以上のことを支援する園文化創造アドバイザーに一部の大学研究者がなる

以上の提案は、次のようにまとめることができる。園の職員集団は、園文化全体の概要を顕在化させて、園の当面の課題について納得すると共に、主体的努力の継続こそが大切であると共通理解し、自分たちの主体性を強化することを目指す。そうして生じてくる保育者の主体的な保育実践の中から実践研究を育てていくことを目指す。

本研究では、これらのことを支援する存在を園文化創造アドバイザーと呼んでいる。この園文化創造アドバイザーは、今日の歴史的状況を考えれば、大学研究者がなることが現実的であると考えられる。なぜなら、現在、実力ある、あるいは、指導的立場にも立てる教育者を育てるための教職大学院が目ざされているように、従来以上に大学研究者が教育現場に貢献することが求められているからである。また、大学研究者は、大学等研究者についての情報も得やすく、必要な研究者を探し出すこともできると考えられるからである。

本研究で述べる園文化創造アドバイザーに関する先行研究は、見いだすことができなかった。ただし、近い考え方を持つ研究者は存在する。その研究者は、大場幸夫である。彼は、2008年3月の保育所保育指針改定にかかわった『『保育所保育指針』改定に関する検討会』の座長である。ここでは、彼の考え方との主な共通点と相違点を述べて、園文化創造アドバイザーの特徴をより明確にしたい。

大場²⁾は、保育所保育指針改定に伴って、「保育現場に新たにのぞむ視点」の一つとして、「園生活はその営み自体が文化であるという視点から実践の振り返りがなされているか」という視点をあげている。その理由として、「文化としての保育実践という視点から保育計画を見直すことが必要だから」と述べる。この点については、彼の著書『こどもの傍らに在ることの意味』でより詳しく論じられている。彼は言う。³⁾「忙しい保育所の状況を十分に理解してもなおやはり殺風景な園環境は、保育者の感性が問われるところであり、保育計画に多大な影響を及ぼす。型どおりの飼育栽培もそうだし、月刊保育雑誌の切り売りのようにどこへ行っても同じような壁面装飾を目の当たりにすると、保育環境の文化的な貧困を保育者集団はどういうふう理解し認識しているのかと、その専門的なセンスを問いたくなる。」

「拘るようであるが、文化は…園の住み心地を築く。」
「園独自の文化として、どういう生活の様式が確立されているだろうか。」まず注目したいのは、彼がそれぞれの園を意識しており、そこでの保育環境を含めた園生活の様式つまり文化を問題にしている点である。続いて注目したいのは、それぞれの園がその文化をより豊かにしていくという観点から、保育計画を見直していくことを重視している点である。

こうした視点は、重要であり、筆者も同じ視点を持つ。それは、次の理由からである。2008年改定の保育所保育指針では、「今まで以上に保育の質の向上が求められ」、「保育の実践において組織性及び計画性をより一層高め、保育所保育の全体的な構造を明確にすること」や「子どもの発育・発達を一貫性を持って見通し、発達過程に応じた保育を体系的に構成し、保育に取り組むこと」が目指され、保育の全体計画を示す用語が「保育計画」から「保育課程」に改められた。⁴⁾ 保育の質的向上のために、園での保育の組織性、計画性、一貫性、体系性がより重視されるようになったわけである。必然的に、園内での意思統一は求められる。したがって、各園で保育全体が検討される機会は増え、各園内での共通の価値観を反映した活動様式がより確立されていくことになる。この状況の変化に応じながら適切に園の保育の実態をとらえようとする場合、一定の人間集団での共通の価値観を反映した活動様式という意味での文化という観点から各園の保育をとらえることは、有効であると考えられるのである。

他方、保育園保育で育てることがねらわれている心情、意欲、態度は、到達水準を持つものではない。この点については、すでに小川が、幼稚園教育で育てることがねらわれている心情、意欲、態度について、到達水準を持つものではないと述べている⁵⁾が、保育園保育で育てることがねらわれている心情、意欲、態度の場合も同様である。そうすると、それらのとらえ方については、各保育者で差が生じることが予想される。必然的に、各園での意思統一の仕方及び内容や保育計画の内容やその質的向上の仕方は、園独自のものになることが予想される。したがって、それぞれの園がその文化（生活様式）をより豊かにしていくという観点から、保育計画を見直していくという考え方が現実的であるといえる。

それぞれの園を意識し、そこでの保育環境を含めた園生活の様式つまり文化を問題にし、それぞれの園がその文化をより豊かにしていくという観点から、保育計画を見直していこうとする。こうした大場の視点は、幼稚園のカリキュラム（教育の組織的、計画的な全体計画）を見直す視点としても違和感は

ないと考える。彼のとらえ方は、これからの各保育園、幼稚園の保育・教育を吟味する際に、必要であると考えられるのである。

しかし、各園への研究者のかかわり方については、筆者は大場と異なることを試みたいと考えている。彼は、『こどもの傍らに在ることの意味』の中で、次のような考え方を示している。現場で抱える保育上の諸課題に対して、保育者と近接領域の専門家とが「パートナー」⁶⁾ となって進める実践研究が必要である。ここでいうパートナーには、「協働」であっても“指導”の含意を前提にするものではない。⁷⁾ 筆者も、あくまで保育者の方々が主体となることを重視し、協働することを目指しているが、保育現場での個別の諸課題に対応する前に、園文化全体の概要を顕在化させ、園の当面の課題を職員の方々が納得できるように支援することに尽力したいと考えている。その過程で、例えば、職員の方々が、園内での個別の諸課題を生じさせている構造的問題を把握し納得し、園の当面の課題を設定された場合、有益であろう。また、職員の方々が、園の保育全体を向上させるための当面の課題を共に見だし納得していく場合も、有益であろう。その際、筆者は、具体的に何を園の当面の課題とするかについては、園内の職員の方々が決められることであると考えながら、園の職員の方々の主体性を強めるための思考のプロセスについては助言することを考えている。また、後に、保育実践研究を育てていく場合も、そのプロセスについて助言することを考えている。こうした助言を含めるという意味で、園文化創造「アドバイザー」という用語を用いている。

保育現場の方々との協働を志向していても、園文化全体の概要の顕在化と園の当面の課題の納得とを最初に行うべきこととすることと、職員の方々の主体性を強化したり保育者の保育実践研究を育てたりするための思考のプロセスについて助言することとは、大場の考え方と異なるといえる。

以上のような特徴を持つ園文化創造アドバイザーは、園文化全体を視野に入れているように、最終的には、子育て支援関係の内容も含めて当面の課題を設定し、研究へとつなげていくことを構想している。しかし、本研究では、保育者自身による保育実践研究の推進を実現するための園文化創造アドバイザーの役割に範囲を限定している。また、園文化創造アドバイザーの研究は始まったばかりと考えられるので、このように範囲を限定することは、研究手順としては有効であると考えられる。

2. 保育者の主体的努力の継続を実現するための留意点

1) 人格ないし人間の完成へ至る過程及びそこへ至るための基礎の追究を踏まえての保育者自らの保育実践の追究

筆者は、園文化創造アドバイザーの観点から、保育者の主体的努力の継続を実現することが、保育者の主体的な保育実践研究を推進するために必要であり、その実現のための留意点があると考え。最初にその点について論じる。

教育基本法では、「教育の目的」として、「教育は、人格の完成を目指し」と述べられている。このことから分かるように、わが国においては、人格の完成を目指すことが教育の本質ということになる。その上で、「幼児期の教育」について、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と明示されている。つまり、幼児期の教育では、人格の完成を目指す教育の本質を意識することに加えて、まさに、人格完成へ至るための基礎を培うことが強く意識されているといえる。したがって、保育にかかわる人々は、人格完成へ至るための過程とそこへ至るための基礎を培うということについて追究し、その理解と目的意識を明確にしなければならないことになる。

例えば、津守真の場合、E・H・エリクソンによる生涯発達の諸段階についての考え方を学び、自らの保育者としての体験を積み重ね、著書『保育者の地平』の中で次のような考え方を示している。⁸⁾ エリクソンの提示した八つの発達段階には、それぞれの段階で学ぶ徳、すなわち、「社会と個人を支える、生命性をもった精神の力」がある。「乳児期の最初に子どもは人間と世界を信頼する体験をし、それによって『希望』の徳を学ぶ。」「幼児前期には、『意志』の徳を学ぶ。」「幼児後期には遊びの中で『目的意識』が育てられる。」「児童期には、仲間と競い合いながら自分を強めていく『有能性』の徳を学ぶ。」「青年前期には、仲間に対する『忠誠』を学ぶ。」「青年後期には、特定の人との間の『愛』の徳を学ぶ。」「これまで自分自身を強めることにエネルギーを使っていたが、その後は相手に対する愛の故に自分を犠牲にするという自我の質の転換があると思う。」「壮年期には相手の人間を『育てる』徳を学ぶ。」「壮年期にある保育者は上に述べてきた『希望』『意志』『目的』『有能性』『忠誠』『愛』を、それぞれの対極との葛藤と危機を通して、子どもとの生活の中で何度も学び直し、確認する。子どもが真剣に学んでいることは、保育者も、壮年として新たに学ばなければならない。」「そして人生の最終期である老年

期には、『知恵』の徳を学ぶ。」津守は、「保育者は、子どもが成長するのを助け、自分も人間の生涯の完成に向かって成長をつづける」⁹⁾と述べる。このような考え方と生き方は、人格ないし人間の完成へ至る過程とはどういうものかとか、その基礎とは何かとかの問いを持ちつつ生き、保育実践を行う人間でないと不可能であるといえよう。

彼のこの部分の論述では、エリクソンの考え方が基礎になっているが、人によっては、論語の人間の完成されていく過程とか、仏教における人間が高度になっていく過程とかを学び、それに大きな影響を受けて、人格ないし人間の完成へ至る過程及びそこへ至るための基礎を追究しながら、自らの保育の追究を行っていくかもしれない。

わが国の幼児期の教育の本質的目的を踏まえれば、人格ないし人間の完成へ至る過程及びそこへ至るための基礎に関する追究と、自らの保育実践の追究とが、保育者には必要不可欠であるということになる。そうであるとすれば、保育者は、保育実践を積み重ねれば積み重ねるほど、概して、保育の中で本当にしなければならないことは何かとか、保育者の職務の中で自分自身の課題についてどう考えればよいのかとかについて、信念と自信を強めていくはずであろう。そして、園全体でその追究が行われ、実感し、納得したものを得ることができれば、より主体的に園の保育を推進することができると考えるのである。

2) 保育の基本と特に重視することの納得に基づく保育者自らの保育実践の追究

次に、ここで、保育実践研究において保育者集団の主体的努力が行き詰まった事例と保育者集団の主体的努力が継続されている事例を取り上げ、さらに考察を深める。

保育者の主体的努力が行き詰まった事例1は、2008年2月にA園が周囲の園と行っている共同実践研究について相談を受けたときのものである。

【事例1：保育者集団の保育実践研究が行き詰まる】

A園の園長の話では、現在、共同研究が行き詰まっている。これまで、子どもの安全をテーマに研究を進めてきたが、違和感を感じる保育者が生じてきた。研究ではテーマから離れてはいけないという大学研究者からの助言に従い、同じテーマで研究を続けてきたが、展望が開けない。ただし、子どもの姿をより細やかに見ることができるようになった保育者たちは、喜びを感じている。

この地域の保育園は、これまで、幼稚園のような発想で、朝からの約4時間の保育を充実させようとし、午後の保育は子どもが安全に遊んでいること以上に充

実した保育を行おうとしてこなかった。そこで、午後の保育の充実を模索・研究することが必要であると実感するようになってきた。その結果、行き詰まっていると言われる。

筆者は、自分たちが取り組まなければならないと実感することを研究テーマとして設定することが必要ではないかと主張した。さらに、直接安全にかかわる場面に範囲を限定しなければならないのではないかと意識に対して、確かに、一般的には、研究ではテーマから離れてはいけないが、例えば、事故が生じる場合、子どもたちの疲れがどうであったかとか、情緒の安定度はどうであったかとか、その1日の保育全体がどうであったかとかが関係しているのではないかと問うと、園長は同意される。それではなぜその大学研究者に狭く範囲を限定できないと主張しないのかと問うと、専門の研究者から学ぼうと思っていたと返答された。

ここには、二つの問題が横たわっていると考えられる。一つは、その大学研究者がA園の歴史やそれを踏まえた上での園の当面の課題を把握できていないということである。研究一般のことを話すこと自体は必要なことであろうし、前述のアドバイスは善意からであろう。しかし、歴史的背景と当面の課題が把握できていない場合、アドバイスそのものはどのような結果をもたらすか分からない。その上で、今一つの問題は、保育者が研究において主体性を十分に発揮できにくい状況である。保育を良くしようとする実践研究は、あくまで保育者側にしっかりとした主体性がなければ推進しにくい。こうした状況は、改善されるべきであろう。

では、どうすれば、保育者の強い主体性が生じてくるのであろうか。参考になるのが、東京都台東区立大正幼稚園の平成17・18年度の研究の発表内容¹⁰⁾である。この発表内容について、研究に参加していた戸田は「特に研究のプロセスについて、迷ったことも飾らずに紹介されているところから、実践研究のあり方についてヒントも読み取れると考えました¹¹⁾」と述べる。筆者は、保育者自身の保育実践研究においては、主体的努力の継続が重要であり、その実現に何が必要なのかについて、この研究のプロセスから示唆を得ることができる。ここでは、その概要を事例2として示した上で、考察を深めたい。なお、下線は筆者による。

【事例2：保育者集団が主体的に保育実践研究を修正・発展させていく】

大正幼稚園は、「子どもたちと保護者の方々と、併設の小学校、そして地域の方々、みんなの笑顔があふれる幼稚園を創りたい」と願い、平成17年度の園内研

究会のテーマを「コミュニケーション能力を育てる援助の工夫」とした。

しかし、コミュニケーションを「相手との意味ある相互交渉」ととらえ、「相互交渉の実態は幼児の記録から探ったけれど、分析の観点も先行研究をもとに決めたいけれど」、「すっきりしない！これって、私たちの本当に知りたいこと？」と疑問に思うようになり、「違う！」と判断し、次のように考え直した。「私たちは、言葉巧みな子どもを数多く育てることではなく、相手とよりよい関係を築いてほしいと願っているのです。」「気持ちが通じ合うこと、心と心が響き合いつながり合う関係を大切にしたいのです。みんなの笑顔、幸せを創りたいのです。」その結果、平成18年度の研究主題を「心をつなぐコミュニケーション—さまざまなかわりを通して—」に変更した。

さらに、「あたり前のことを改めて『何がしたいの？』と確かめあって」、「事例の分析は研究の客観性や、系統性をつかむ上でとっても大切ですが、その事例を次の保育にどのように生かしていくのかに焦点を明確に当てようと考えた」。そして、「私たち、保育がよくなった、子どもたちが育ったという実感がほしい!!具体的なものをつかみたい!」と願い、「やっぱり毎日の保育で子どもをしっかりと見ましょ!!子どもの気持ちがどこにあるのかをつかましょ!!」となった。

その上で、「子どもも保育者もかわる人みんなの心がつながったら幸せ…!!」と考えながら、小学校の児童・教師や関係する大人たちとの心のつながりを創っていった。また、作成する研究資料についても「新規採用の人でも分かる研究資料を作って明日からでも役立つものもいい!もちろん、私たちが納得できるもの!!」を目指した。

また、「どうして?分からない!」から、「そういうことか!ちょっと納得!」となり、「次はここが課題!!」という課題設定プロセスを取ったことも示している。

筆者は、この事例から次の示唆を得る。まず、子どもをしっかりと見、子どもの気持ちをつかむという保育の基本に加えて、実線下線部、つまり、関係する人たちの心がつながり笑顔があふれることが特に重視されており、研究が行き詰まったときも、そこに帰っている。また、生み出された実践についても、小学校の児童・教師や関係する大人たちだけでなく、これから新規採用される人にまで心がつながっていくことが意識されている。こうした心がつながり笑顔があふれる世界を創り、その中に住むという体験は、まさに、子どもの世界観、人間観の基礎となるものであり、人格完成へ至るための基礎を培う上で特に重要な点になると考えることができる。大正幼稚園では、実線二重下線部のように、納得する

まで追究されており、人格完成へ至るための基礎を培うことに関する部分で、しっかりとした納得がなされ、問題に直面したとき、そこに帰ることができている。また、波線下線部のように、保育に生かされる、保育が良くなる、保育を切り開くことが、実践研究の目的になっている。つまり、保育の基本と人格完成へ至るための基礎を培う上で特に重要になる点について納得し、それを実現することと、保育を実際に良くすることとが目指されており、それが可能になるように、主体的努力が継続され、研究テーマや研究の仕方や資料のまとめ方も決められているのである。

筆者は、保育者自身が主体的努力を継続できることを第1に重視する。その実現のためには、保育の基本に関する考え方と共に、人格完成へ至るための基礎とは何かとか、園で特に何を重視するかとかを、保育者集団自らが、自分の経験や教養に基づいて考え直し、実感し直し、納得できていることが重要であると考え。こうしたことは、園の保育に特色をもたらすだけでなく、保育者集団の信念と主体的努力の継続につながると考えられるからである。その上で、その信念の実現を意識的に目指していくことができれば、より良い保育実践の追究や保育実践研究において、保育者集団の主体的努力は継続されていくであろうと考える。園文化創造アドバイザーは、この点に常に留意しておく必要があると考えられるのである。

3. 園文化創造アドバイザーの基本的役割に関する考察

保育者の主体的な保育実践研究を推進する園文化創造アドバイザーの基本的役割は、以上から大別して、二つある。

一つは、職員集団のより確かな信念と主体性を確立していく支援である。園文化全体の概要を顕在化させ、職員と共にそれを吟味し、当面の課題について納得し、同時に、主体的努力の継続こそが大切であると共通理解していくことである。その際、特に、保育の基本や人格完成へ至るための基礎やそれを踏まえた上で園の保育において特に重視することについて、保育者自身のそれまでの経験・教養を基に実感・納得を求めることが重要であると考え。

今一つは、保育者の主体的な保育実践研究を育て発展させていくことである。そのためには、より良い保育の実現を目指す延長線上に実践研究が成り立つことを支援する必要があると考える。まず、保育者集団において、例えば、自分たちが経験的に実感していることを事実に基づいて検討してみることで

を促したい。その上で、さらにその研究を質的に向上させることを求める場合、他の大学等研究者との効果的な協働を実現する。その園の保育実践研究を支援しやすい大学等の研究者を探し、両者を結びつけていくのである。

4. 園文化創造アドバイザーという役割を構想するまでの体験とそこでの考察

筆者は、二つの園とかかわる中で、平成20年3月の時点で、園文化創造アドバイザーという役割を構想した。ここでは、園文化創造アドバイザーの役割をより具体的にしていくために、この二園とのそれまでのかかわり合いとその中で考察の概要を取り上げる。

1) B幼稚園における当面の課題の発見と保育実践研究への展望

B幼稚園は、異年齢の友達や他の多くの人たちとのかかわり合い、豊かな自然との多様なかかわり合い、歴史や文化とのかかわりを特に重視し、他の保育関係者たちから豊かな保育を行っていると評価されている。そうしたことから、筆者は、B幼稚園の実践を、平成19年より月1回約2時間ほど見学させていただき、注目した点を記録し、不明なところについて質問し確かめたりしていた。また、指導計画や園便りをいただいていた。さらに、園長の考え方も記録し、園長が職員や保護者と保育に関して対話したりアドバイスしたりする方法に関する資料もいただいていた。

B園の文化の中で、筆者は、特に次の点に注目した。それは、前述の特色を持つ保育を目指す中で、通常1日約2時間弱、保育者全員で異年齢自由保育を展開し、そこでは、園長の姿から保育者が学び、保育者の姿から年長児が学び、その姿から年中・年少児が学ぶという共同体が成立していることである。この点から、職員が園長の示す保育論と保育実践から学び、保育実践力を向上させていく体制が整っており、その推進が園の課題となっていると判断した。言い換えれば、職員が園長から学び、教育方針・園の特色について園長に近いレベルまで引き上げた考え方と実践力を身につけていくことが課題となっていると考えた。そして、このことについては、園長も同意された。

この課題を踏まえれば、その時点のB園では、保育者は園長と対話し、自らの保育実践や保育実践研究を進めていくことが妥当であろう。例えば、園長は、子どもをそのまま見てその豊かさを発見していきける良い場として砂場をあげ、砂場での保育実践研究を奨励されていた。また、専門的強みを持つこと

の大切さを語られ、保育者が3歳児の保育を何年か継続することを提案されていた。さらに、週案や子どもに関する記録を材料に対話もしアドバイスもされていた。園長はそれぞれの保育者に応じて対話やアドバイスをしようとされており、その対話やアドバイスをヒントに保育者がその園の保育実践と保育実践研究を推進していくことが、その時点のB園では妥当であろう。

また、園長は、職員をはじめとする周りの人たちが質問したり自分の意見を述べたりすることを求めているが、現時点では理解できているのか、ほとんどないので、筆者の質問や見解を歓迎されていた。園長自身が自己の絶えざる見直しを課題とされていた。

さらに、B園の園長は、入園希望者が増え、職員の体制も整い、安定期に入った実績を背景に、次のように話された。園長には、職員と保護者にビジョンを示し納得させる力と、職員の保育を評価し、どう努力しようとしているか観ながらアドバイスする力とが、必要であると。そして、筆者との対話の中で、関係する幼稚園でも園長の役割が充実していくことが、重要であるという議論が生じた。つまり、園そのものの課題を超えて、周囲の仲間園の発展も課題として上がっていた。こうしたことから、周囲の仲間園と共に、園長のあり方についての共同研究を行うことを課題とすることも考えることができた。

2) C保育園における保育思想及び課題の発見と保育実践研究への準備

筆者は、平成19年4月より、C保育園から要覧や指導計画等をいただき、その歴史について伺い、平成20年より月1回保育を見学させていただいていた。注目したところや考えたことを記述すると共に、保育についての考え方を伺ったり、質問をしたりしていた。その保育思想の深さ、先生方が子どもたちにかかわられているときの優しい雰囲気、保護者が園を信頼している姿、地域の人たちの園児たちへの優しいまなざしなどに注目し、C園とのかかわりを続けていた。

C保育園の文化についての筆者のとらえ方は、次のとおりであった。C保育園は、自然の中で遊んだり、自然と人間の共生している里山で遊んだり、様々な植物を栽培したり調理して食べたりする保育実践を重視している。そして、自然の中で、その神秘さや不思議さに目を見張ったり、興味ある物を発見し感動したりすることを大切に、そうした心を育てようとしている。その過程でこそ、子どもは人間が自然や社会の一部であることを実感し共生で

きると共に、自らの追究や創造を行うことができるようになると思われている。実際、それらの体験をとおして、子どもたちの意欲が現実を高まってきたことを実感されている。遊びの時間においては、先生方は、子どもにかかわるというよりも、子どもにつきあおうとしていると筆者は感じ、仲間に近い感じがしている。園長の子どもたちへの語りかけには、慈愛が感じられる。また、十分に体を動かすことができていることで、子どものたくましさを保障しようとしている。子どもたちが制作活動などで集中力を持続できている姿も重視されている。さらに、園長は、職員に対して、基本的なこと以外はあまり口を出さず、自由に保育をさせているとのことである。むしろ、職員が良くやっている、職員のおかげであるとよく話されている。地域の人たちから高い評価も得ており、近所に住む人たちのまなざしも温かい。

こうした理解や実感の過程で、筆者は、その園の要覧や指導計画等をいただき、保育に関する考え方や特に重視されていることや園の歴史についても伺った。また、月1回のペースで実践の観察や筆者の感想を起点とした話し合いもできていた。それで、園文化の概要が何とか理解できているのではないかと思われた。逆に言えば、園の要覧や1回2回の保育見学だけでは、園が、人間本来の姿をどのようにとらえているのか、また、その本来の姿になるための基礎が何であると考えているのかを理解することは到底できないと思われた。そうして、筆者は次のように考えた。園文化創造アドバイザーは、研究を支援する前に園文化全体の概要を顕在化させる必要があるが、それが共感的なものでなく、園の先生方の実態・実感から離れていた場合、アドバイスは、園そのものの主体性を強化するどころか、行き詰らせる可能性がある。前述の事例1のように、園の歴史や課題を把握することなく行われたアドバイスは、予想外の結果をもたらすことがあるが、園文化の顕在化そのことにも慎重さが求められる。園の先生方と共に納得するというプロセスは、欠かしてはならない。

その時点での筆者の判断では、園長と他の職員とでは蓄積したものに大きな差が感じられた。そのことは、予想外の事態、例えば、例年と違って雪が積もったときの保育の構想・展開、あるいは語りかけの内容、子どもに語りかけるときの姿そのもの、保育について語られるときの基礎となる体験の豊富さから感じられた。したがって、その時点のC保育園では、園長の保育思想と保育者としての心と子どもへのかかわり方を十分に把握し、発展的に継承する

ことが大切であると考えた。そして、この園の文化を踏まえた上で、園長の持つ園の保育思想の明確化及び再検討と指導計画の再創造を中堅・若手の先生方が行うことが一つの良い課題になると考えた。そして、副園長にそうお話ししたところ、まさしくそうであるという実感の伴った返答をいただいた。C保育園のその時点での課題について、共に納得できたのである。

そして、中堅・若手を中心に、園の保育思想の明確化、園の重点項目の明確化、指導計画の見直しと再創造を行うことになった。園の保育思想の部分に関しては、人格完成へ至るための基礎を自分たち自身で考えるための資料の収集も行う。例えば、小学校以降での卒園児に関する評価を聞き取る。また、人格形成に関する自分自身の経験に基づく考察も行う。園が園として向上していく以上、事実と実体験に基づいて、人格完成へ至るための基礎について考え、確信に近づいていく必要があると考えた。また、この作業と並行して、保育実践から研究を育てるために、園内で良いと考えられている実践に関する記録の蓄積や保育者の実感を実証する事実の収集も、進めることになった。

これらのことを推進した結果、園の職員と筆者とでは、実践研究上できないことが生じてくる。その時、そのできないことを可能にするために、他の大学等研究者の協力を求めることになった。

5. 園文化創造アドバイザーの具体的役割に関する考察と今後の課題

以上を踏まえて、保育者の主体的な保育実践研究を推進する園文化創造アドバイザーの具体的役割について考察する。

まず、園文化創造アドバイザーは、園の職員の方々の主体性が強まるように、かかわっている園文化全体の概要を顕在化させることから始める必要がある。その際に、明確にしていく必要があると考えられる点を構造的にとらえてみたのが、図1である。

基本となるのは、保育に関する基本的価値観である。その際、保育において特に何を重視するのかについては、とりわけ、職員との対話を深める必要がある。そのことは、人格完成へ至るための基礎をその園がどうとらえているかを顕在化させる上で、重要ではないかと考える。それと共に、保育・子育て支援の計画を把握しつつ、保育・子育て支援の実践を観察しつつ、また、職員研修の体制や現在の研修内容についても伺って、総合的に現在の園文化の概要を顕在化させていく必要がある。また、園の歴史

について可能な限り把握し、園文化を職員の方々によって生成されてきたものとしてとらえ直す必要がある。収集資料としては、園の要覧、保育計画（カリキュラム）、指導計画、子育て支援の計画、実践記録、観察記録、聞き取り内容等をあげることができる。

園文化をできる限り多面的構造的にとらえた上で、職員と共に、それを吟味し、当面の課題について納得する必要がある。当面の課題は、例えば、新たなカリキュラムを創造することなのか、伝統を再検討しながら継承していくことなのか、若手職員の実践力向上を可能にすることなのか、あるいは、園長が保育論をより洗練させて職員や保護者を説得し納得させることなのかを明らかにする。その上で、主体的努力の継続こそが大切であると共通理解しておく必要がある。

そのことと並行して、園の保育実践の中から研究を育てていくために、資料収集を促す必要がある。園の当面の課題と関連して生まれる実践について記

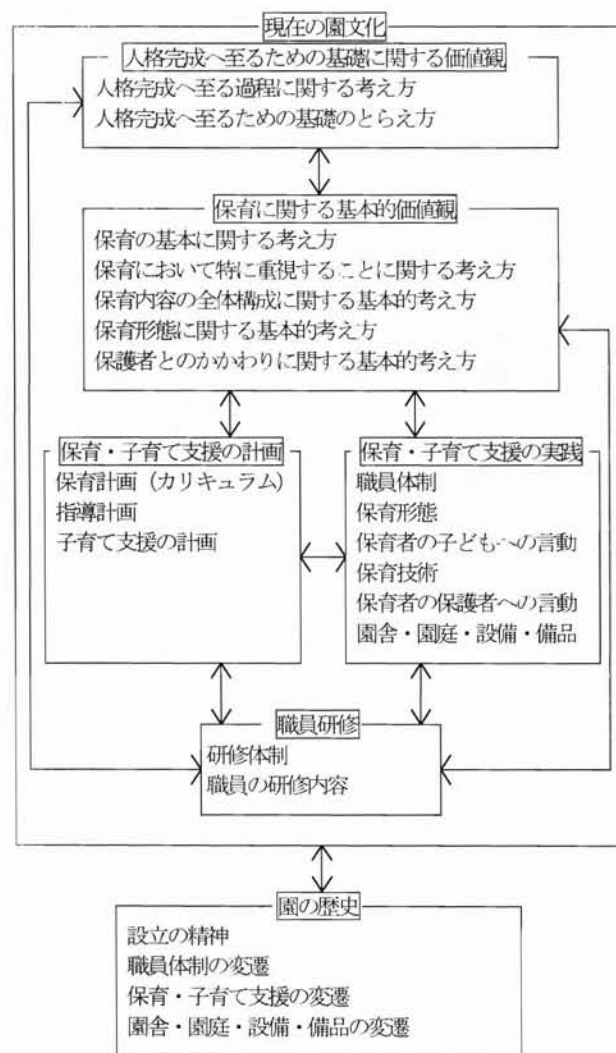


図1 園文化全体の中で明確にしていく必要があると考えられる点とその構造的把握

録をとることを提案したい。また、優れていると考える実践や自分たちが実感している保育の成果を実証できる記録を積み重ねること等も提案したい。

さらに、園の職員と園文化創造アドバイザーとでは、実践研究上不可能なことが生じる場合、そのことを可能にする研究者との協働を実現する必要がある。なお、協働を依頼する研究者に対しては、その園の保育実践研究に加えて、少なくとも、その園の求める保育の概要と当面の課題について十分に説明し、理解しておいていただく必要がある。

以上の具体的役割からも分かるように、園文化創造アドバイザーは、園の職員集団の信念と主体性の強化を目指しつつ、研究的に園文化が創造されていくように支援する存在といえる。そして、本研究では、園文化創造の範囲を保育実践に限定して考察した。園文化創造アドバイザーには、多くの力の総合力が必要であると現時点では考える。少なくとも、保育思想ないし保育論や保育実践そのものに関する収集資料から保育思想ないし保育論を構成していく思想・理論研究の力、保育思想ないし保育論や保育の計画と共に、職員体制や保育者の保育実践・研修内容を踏まえて、園の課題を明らかにしていく園経営研究の力、具体的な保育実践を生み出していくための実践研究の力、園の歴史に関する資料から保育思想ないし保育論と保育実践の生成過程をとらえようとする歴史研究の力、また、保育者の方々への共感的理解の力が必要である。

現在、園文化創造アドバイザーに関する先行研究は見いだすことができていない。園文化創造アドバイザーは、前述のそれぞれの力を高めることを目指しつつ、保育現場とかかわる自らの実践研究を本格

的に推進し、自らの実践的総合力を高めていくことが、今後の課題である。

注

- 1) 筆者が関係している保育所では、ほとんどが公的に〇〇保育園という名称を使っておられるので、そのことを尊重し、本研究では保育園という名称を用いる。
- 2) 大場幸夫「保育所保育指針の改定について～2007.9.15：NPO保育総合研究所：総会〈報告〉より～」『保育の実践と研究』Vol.12 No.3, 2007年, 10-11ページ。
- 3) 大場幸夫『こどもの傍らに在ることの意味 保育臨床論考』萌文書林, 2007年, 210-211ページ。
- 4) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館, 2008年, 125-126ページ。
- 5) 小川博久『保育援助論』生活ジャーナル, 2000年, 102ページ。
- 6) 大場幸夫『こどもの傍らに在ることの意味 保育臨床論考』萌文書林, 2007年, 128ページ。
- 7) 同上書, 128ページ。
- 8) 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房, 1997年, 271-274ページ。
- 9) 同上書, 279ページ。
- 10) 台東区立大正幼稚園・戸田雅美「特集 5歳児の遊びと生活 研究報告 心をつなぐコミュニケーション—さまざまなかかわりをとおして—」『保育の実践と研究』Vol.12 No.3, スペース新社保育研究室, 2007年, 17-36ページ。
- 11) 同上書, 17ページ。